

# 平安散文作品における「鬼」の描き方 - 『伊勢物語』第六段のリアリティー-

福島魁士

(文19-566 国文学コース 松本ゼミ)

## 【目次】

- 1、研究の概要
- 2、説話作品における「鬼」の特徴
- 3、物語・日記作品における「鬼」の特徴
- 4、『伊勢物語』芥川段の違和感
- 5、『伊勢物語』『今昔物語集』の比較
- 6、『伊勢物語』芥川段の特徴的な表現
- 7、おわりに

# 1、研究の概要

## 研究目標

- ・平安散文作品における「鬼」という語の用法を確認する。
- ・他作品とは用法が異なる『伊勢物語』第六段の「鬼」について類話との比較を通してその特徴を捉える。

## 研究手法

- ・平安散文作品を「説話文学」「物語・日記文学」に分類し、それぞれにおける「鬼」の用法を調査
- ・『伊勢物語』第六段、『今昔物語集』巻二七第七段の比較

## 2、説話作品における「鬼」の特徴

実体を持ち、人間と干渉する。

→夢の中のこともあれば、現世に現れることもある。

人を襲い喰う鬼（『今昔物語集』巻二十七に頻出）

○人気のない建物に潜む、

○人を喰った跡が残る、

○神仏に祈ることで助かることがある

などという共通した特徴がみられる

### 3、物語・日記作品における「鬼」の特徴

作品世界に現れることも、人間と干渉することもない人々の会話や地の文において、比喩表現として用いられる

心の鬼…『源氏物語』で多用。良心の呵責、疑心暗鬼などの意味

心なきものとしての「鬼」…鬼でさえ心を動かすような素晴らしさ

鬼でさえ見過ごすような美貌→『源氏物語』のみの表現

## 4、 『伊勢物語』 第六段の違和感

『伊勢物語』 第六段：通称「芥川」段

→物語作品であるにも関わらず「鬼」が実体をもって登場し人を襲う

説話文学の特徴とも齟齬がみられる

→「鬼」が女を喰った跡が残らない

本段特有の要素として、「鬼」の正体についての後語りが存在する

# 5、 『伊勢物語』 『今昔物語集』 の比較

『伊勢物語』 第六段	比較要素	『今昔物語集』 卷二十七第七
「男」と「女」女の説明が作品後半にある	登場人物	業平については詳細あり、「女」は実名なし
芥川付近のあばらなる倉 夜も更けた頃・雷雨が響く状態	場所・ 日時天候	北山科の山荘、離れの校倉 日時天候は記載なし
自然現象として外で鳴り響く 男にとって「あなや」を聞き逃す要因となる	雷	校倉内で「雷電霹靂す」 鬼の仕業である可能性が示唆
最初から蔵の外で警固している 夜が明けるまで蔵の中に入ることはない	男の動き	当初は校倉内で女と臥せていた 雷電霹靂後刀を出す、ずっと倉の中にいる
「はや一口に食ひてけり」 女の跡は残らない	食人描写	鬼が女を喰った、という直接的描写はない 女の頭の端や服がその場に残る
「あなや」と叫ぶが雷雨により 男には聞こえない	喰われた 女の描写	何も音を出さない
女の出自、鬼の正体（女の兄弟）について記載	結末	雷電が止み、女の気配がないのを不審がって女の方をみて気づく

→ 『伊勢物語』の方が現実的に起こりうる動きである

## 6、 『伊勢物語』 芥川段の特徴的な表現

○「はや一口」…作中後半で女が存命していることが判明している

→女を殺すわけにはいかない（＝女の跡を残してはならない）

○「あなや」…女が「鬼」に襲われたときの叫び声のように描かれる

→作中においても「鬼」の存在は虚構、本当は女が助けにきた兄弟を見つけた際の声、などの解釈が可能

→この記載によりあたかも「鬼」が存在し女を襲ったかのように思わせる効果がある

# 7、まとめ

## ○説話における「鬼」

…実体をもって登場、人間と干渉

## ○物語・日記における「鬼」

…実体を持たない、比喩表現の一種

### 『伊勢物語』第六段の「鬼」

説話的性格を持ちながらも、現実的な展開を見せる作品全体として虚構である「鬼」の存在を現実的なものにすべく工夫が凝らされている